

二〇二五年度 医学部医学科 一般選抜試験（一日目）

「論文」問題用紙

注意事項

- 1 解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
- 2 問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

共感における自分と相手の同一視は、自分と相手の差異を認識していても可能である。自他の混同がなく、自分と相手の差異性と同一性を同時に認識しているからこそ、共感の体験として内省が可能なのだ。そして、相手との違いを認識していても、相手と同じような感情が生じれば、混同はせずとも動揺し、相手と同じ立場にあるような錯覚は生じ得る。

相手が窮地に立たされて苦しんでいれば、まさに自分自身が窮地に陥っているかのような切迫感を抱き、本当に苦しくなってくることもある。こうしたケースは瞬間的で長続きしないのが一般的で、相手が親しい人であったり、強く共感しやすい人でなければ、場所を移動して相手が見えなくなると、大抵の場合は消失する。共感が生じるとき、私たちは「自分のことではない」とわかっていても、相手と同じ立場、状況にあるかのように感じることはあるのだ。

では、一体なぜ「他者の感情と同じ感情が自らの身に生じている」という確信が、つまり共感が生じるのだろうか。

まず、他者の心中を想像し、推論することで共感が生じる、という場合がある。相手の事情を理解したり状況が想像できれば、もし自分が同じ立場ならどう感じるのか、その状況に身を置いて考えることもできるし、それに見合った感情も生じてくる。その感情を相手とほぼ同じものだと考えるのは、ごく自然なことだろう。

相手が自分と同じ考え方、感受性、価値観だと確信できればなおさらである。そのような確信だけでも私たちは共感と呼んでいるが、こうした認知的共感が生じれば、それによくなって相手と同じ感情も生じやすい。そして、この感情の共有を情動的共感と呼ぶなら、認知的共感を抱いた相手には情動的共感も生じやすい、ということになる。想像や推論、対話によって認知的共感が生じると、その相手に感情的に共振し、感情の一致を確信する情動的共感が生じるのである。

一方、想像や推論を介さず、相手の様子を見て即座に共感が生じる場合も少なくない。相手の状況がすぐには把握できないにもかかわらず、相手を見ただけである種の感情が湧き起こり、その感情が相手の状況に見合ったもの、相手とほぼ同じ種類のものだと思うのである。

この場合、情動伝染のような直接的な感情交流が生じている。相手の感情に自分の感情が直接反応している、という仮説を立てることもできるが、それを証明することは難しいだろう。

すでに心理学的研究が解明しているように、無意識のうちに相手の表情を模倣してしまい、この模倣が感情を喚起している可能性はある。だが、大人の共感を考えてみると、幼児が模倣を介して共感するよりも、はるかに複雑な感情を含み込んだ感情を理解しているし、それは経験的な知識、感情体験の豊富さがなければ難しいように思える。

考えられるのは、過去に似たような状況、他者の表情や態度を経験し、同じような状況や態度を目にして、その時の感情が賦活された可能性である。過去に何度も苦しんでいる人たちの表情や態度を見ていたり、自分自身が似たような経験をしていると、同じような表情や態度、雰囲気に出会うと、状況を理解する前に、即座にその時の感情がよみがえる。というより、そうした感情の経験の積み重ねによって、類似の状況に対応する感情が喚起されるのだ。

この考えの難点は、乳幼児や動物の情動伝染をうまく説明できないことである。チンパンジーやイルカ、ゾウの感情が、過去の経験と結びついているかどうかはわからないし、想像力、推論の力という点でも限界がある。それはごく幼い子供も同じだろう。

しかし、人間は成長するに従い、豊富な感情体験や知識が蓄積され、想像力や理性が磨かれるため、より繊細な共感が可能になるのかもしれない。私たちの感情は過去の経験と密接に結びついている。ある過去の経験に類似した状況に遭遇したり、他者が類似した状況に置かれているのを見聞きすれば、その過去の感情が賦活され、場合によってはかなりリアルに感じられるのである。

次に共感という経験が成長にともなってどのように展開されるのかを考えてみよう。

幼児の共感には、最初、相手の感情と同一化し、完全に混同した状態にある。幼児期の初期はまだ自己が確立していないため、自分の感情と他者の感情を明確に区別することができないからだ。特に乳児期はまだ自他未分の状態にあり、ある感情が自分に属する、というイメージそのものができないため、しばしば他者の感情に圧倒されてしまう。母親が苦しそうな顔をしていれば、たとえ状況がわからずとも、自分も苦しくなって泣いてしまうのだ。

すでに述べたように、こうした自他の混同と原初的な共感が乳幼児期に見られることは、脳科学や発達科学など、多くの科学的な研究が示しており、ワロンのように、古くから自他の混同、情動伝染の存在を指摘していた心理学者もいる。そうした事実に対し、哲学者のメルロ＝ポンティは次のように述べている。

共感とは、自己意識と他人意識との本式の区別ではなく、むしろ自己と他人との未分化を前提とするものだからです。共感とは、私が他人の表情の中で生き、また他人が私の表情の中で生きているように思うという、その単純な事実のことです。（幼児の対人関係）

自己と他者が分化していない自他未分の状態、自己と他者の混同こそ共感の前提だというのが、このようなメルロ＝ポンティの主張には少し注意が必要である。

なるほど、共感には確かに自己と他者の感情を同一視する面があり、一時的に混同が生じる場合があるのは確かだろう。しかし、先にも述べたように、自己と他者の区別がなければ共感として認識され得ないはずであり、ある種の混同や錯覚は生じて、自己了解がなければ自分共感しているという自覚的な経験は成り立たない。

幼児期に生じやすい自他の混同による共感においては、共感が生じているという自覚はないし、幼児が共感の体験を客観視して語ることもしできない。後で自分の感情と他人の感情の混同があったことを自覚できなければ、当人にとっては共感体験になり得ないのだ。

（山竹伸二著「共感の正体」河出書房新社）

問1 この文章に20文字以内でタイトルをつけなさい。

問2 自他未分の感情は共感と言えるか、について文中の言葉を用いて100字以内で説明しなさい。

問3 医師として重要な共感を相手に示すには、どのような能力が求められるか、またそのためにはどのような経験が必要か、あなたの考えを800字以内で述べなさい。